

総合的な学習の時間の体系的な評価と活性化に向けた取組 指導と評価・学習と評価の一体化と組織マネジメントの手法を通して -

一色町立一色中部小学校

1 はじめに

本校は平成 11 年度から 3 年間、「ふるさと “一色” の語れる子」と研究主題を設定し、生活科と総合的な学習の時間の研究実践を行った。また、一色町では平成 14 年度から 3 年間、文部科学省研究開発学校として生活科と総合的な学習の時間の小中学校一貫を目指して、9 年間を見据えたカリキュラムづくりと体系的な評価の研究に取り組む中で、本校も実践を継続してきた。

2 平成 15・16 年度の研究成果

(1) 研究の目的

一色町では、平成 13 年度から各学校での総合的な学習の時間の取組が始まっていたが、小学校間や中学校間の連携が十分取れておらず、学習内容の不揃いや学年間での逆転現象という問題が起こっていた。また、その単元を通してどういう力を培っていくのか、どういう力が培われるのかという点の検証が不十分なままであった。そこで、総合的な学習の時間のこれまでの実践や学習指導要領の記述内容などを参考にして、目指す子供像を次のように設定した。

生活の中で生きて働く問題解決力をもった子 自己の生き方を問い続ける子

また、本校を含む 4 小学校の児童が 1 中学校に進学するという校区の特色を生かし、9 年間を見通した大きな枠組みの中で内容系列表を作成し、単元を構成する。そして、各学校が独自で行っていた評価活動を、共通の評価観を基に行ったり、その結果の集積という地道な活動を行ったりすることによって「生きる力」の育成を目指したいと考えた。

(2) 研究の内容

ア 内容系列表と年間指導計画の作成

総合的な学習の時間の目標及び内容は、各学校に任されている。したがって、どのような内容を発達段階に沿って配置するのかという内容系列表を作成した。また、その目標を実現するための内容を、過去の実践を踏まえ、「伝統・文化」「福祉・社会」「産業・経済」「環境・自然」「命・生き方」の 5 つを基本的な視点として設定した。

この内容系列表から、学習内容と目指す子供の姿を決定し、子供の興味・関心や学校・地域の実態から教材を選定し、単元の目標及び学習過程を構築した。そして、年間を通してどのように展開するかという年間指導計画を作成した。

イ 指導と評価の一体化に向けた評価の工夫

(ア) 4 観点による評価

子供の学びは「関心・意欲・態度」が入り口になる。そこから問題に取り組んでいった時に必要な技能が「思考・判断」であり、その成果として身に付けるのが「技能・表現」であり「知識・理解」である。この学びによって「意欲・態度」の形成がなされ、次の学びへと発展していく。そこで、各教科と同様に、4 つの観点を「生きる力」の育成状況を絶対評価するための観点とした。

(イ) 評価規準と評価基準の設定

この4観点は、単元をつくる段階で評価規準として具体化する。評価規準は、内容系列の内容と期待する子供の姿から設定する。評価規準の達成度を測る基準として、A(3)、B(2)、C(1)の3段階の評価基準を設け、評価の数値化を図った。

(ウ) 単元指導計画の作成と評価計画の立案

次に、評価計画を位置付けた単元指導計画を作成した。まず、単元の評価規準を観点ごとに幾つか設定する。学習活動の内容と子供たちへの支援に合わせ、その学習活動でどの観点の何番の規準を評価するのか、また、評価資料を何にするのか特定する。そして、あらかじめ計画した観点の評価規準を、学習活動に合わせて具体的な評価規準に書き表し、達成の指標である基準を3段階で表現する。

1 単元名		2 単元設定の理由		3 単元の目標		4 単元の評価規準	
5 学習過程と評価計画							
学 習 活 動	支 援 (方法・内容)	評 価 規 準				評 価 資 料	
		関心・意欲・態度	思考判断	技能表現	知識理解		
1 商店街と出会う 商店街について知っていることを出し合う。	・ウキウキ通りや日常生活での利用の経験を基に商店街について知っていることを交流し合うことよって商店街についての興味を喚起する。 ・個々のお店にかかわる気付きだけにならないように商店街全体の様子も訪問の視点に入れさせる。					授業の振り返り1	
商店街を訪問する。	・訪問して分かった事実とそれに対する思いを記録に整理させる。					活動記録1	
6 評価基準							
学 習 活 動	評 価 規 準	学習活動における具体的な評価規準	評 価 資 料	評 価 基 準			
				A (3)	B (2)	C (1)	
1 商店街と出会う 知っていることを出し合う。	関心意欲態度	商店街について、もっと知りたいという気持ちをもつことができる。	授業の振り返り1	大型店やコンビニの利用と関連させて商店街について知らないことがあり、実際の姿を知りたい気持ちを書いている。	商店街について知らないことがあり、実際の姿を知りたい気持ちを書いている。	商店街について知らないことがあることを書いている。	
商店街を訪問する。	関心意欲態度	商店街や店の様子、店の人や町の人の様子を積極的に観察しようとする。	活動記録1	商店街や店の様子、店の人や町の人の様子や聞いたことと、それに対する自分の思いを書いている。	商店街や店の様子とそれに対する自分の思いを書いている。	商店街や店の様子を書いている。	

(I) 指導と評価の一体化の記録

授業における一まとまりの学習活動ごとに評価を行っていく。そこでは、その学習における具体的な評価規準の達成度を評価基準によって評価する。その結果から、指導計画を継続するか改善するかを判断し、その後の指導に臨むという一連の問題解決評価を行い記録を取った。

指導・学習の過程

教師の指導及び子供の学習活動の実際の様子を記録

評価結果

評価基準による絶対評価の結果を記録

指導の改善と実施

評価結果に基づいた事後の指導の工夫を記録

ウ 指導と評価の一体化の実践例

6年 単元「商店街発 一色町の未来を考えよう」

単元の目標

商店街を知る活動を通して、商店街の現状や歩み、商店街のもつ「人の温かさ」やそこに暮らす人々の商店街や一色町を愛する思いに気付き、共感し、地域の一員として自分たちなりに一色町の未来のための活動を考え、実践していくことができるようになる。

以下は、子供たちが商店街と出会い、商店街を訪問し個人課題をつくるための準備段階の場面である。ここでは、育てたい能力の観点として、「関心・意欲・態度」を取り上げた。具体的な評価規準は、「商店街について、もっと知りたいという気持ちをもつことができる」とした。

A (3)	B (2)	C (1)
大型店やコンビニの利用と関連させて商店街について知らないことがあり、実際の姿を知りたい気持ちを書いている。	商店街について知らないことがあり、実際の姿を知りたい気持ちを書いている。	商店街について知らないことがあることを書いている。

(ア) 指導・学習の過程

夏休みに商店街のイベント「夜店ウキウキ通り」が開催された。商店街との出会わせのチャンスと考え、2学期早々この話題を出すと、28人が参加していた。ところが、日ごろ商店街で買い物をするか尋ねると、ほとんど利用しない子が13人もいた。ウキウキ通り以外では、意外に利用していないことに驚いた子供たち。次に、商店街について知っていることを出し合った。よく利用する3人以上は、ほとんど発言できない。発言できても、児童Aのように、「お客さんがあまり来ないのは、車で遠くに買い物に行ってしまうからお母さんに聞いた」などと、聞いたことが主であった。このことから、商店街についてあまり知らないことに気付き、知りたいと興味をもち、調べていくことになった。

(イ) 評価結果

話し合い終了後に、授業の振り返り1の記述から、「関心・意欲・態度」を評価した。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価結果		
		A (3)	B (2)	C (1)
関心・意欲・態度	商店街について、もっと知りたいという気持ちをもつことができる。	10人 (33%)	20人 (67%)	0人 (0%)

* 30人がB以上であり、商店街について、もっと知りたいという意欲が生まれたことが分かる。しかし、利用していないならば、その代わりにどこで買い物をしているかには意識が及ばず、よく利用していると思われる大型店やコンビニなどの利用と関連させて書いている子は10人と少なかった。

(ウ) 指導の改善と実施

今後、商店街を追究していく上で、大型店やコンビニの存在を意識させておくことは、より深い追究が可能になると考えた。そこで、修正授業を行い、「商店街を利用していない人が多いようだけど、どこで買い物をしているの？」と問うと、大型店と答えた子が29人、コンビニと答えた子が21人いた。具体的な店名や利用人数を挙げることで、商店街よりもはるかに大型店やコンビニをよく利用している事実気付くことができた。

エ 子供の自己学習力の向上に向けた評価の工夫

(ア) 自己評価場面の設定

「学習と評価の一体化」は、教師の支援を得つつ、子供自身が評価の主体者として問題解決の過程において、自己の学習状況をチェックし、必要な調整を加えて次に生かしていく自己評価活動を意味し、自己学習を促すものとして価値付けた。自己評価活動を学習過程に組み込むに当たり、子供たちの問題解決のサイクルを1時間の授業・まとまった学習活動・単元全体などでとらえ、自己評価場面を固定化しないようにした。

(イ) 自己評価活動を促す基盤づくりと評価の基準の内面化

自己評価活動を促し、自己評価活動への意識を高める支援として、評価的発問・教師による朱書き・教師との対話の三つに積極的に取り組んだ。また、最初は教師の評価規準や評価基準で自己評価させ、徐々にそれを自分の中に取り込んで評価の基準の内面化を図り、子供たち自身が評価の基準を設定できるように取り組んだ。

オ 学習と評価の一体化の実践例（6年 単元「商店街発 一色町の未来を考えよう」）

(ア) 数字なども分かるように具体的に調べよう - 評価の基準 をつくる -

個人課題が決まった後、「商店街について深く知ろう」という学級全体の追究目標を決めた。目的に合わせて訪問先を自由に選択できるようにし、聞き取りや資料集めが十分できるように、3回は訪問する時間を確保した。児童Aは第1・3回で商店街、第2回で大型店の訪問を計画した。

第1回の目当ては、上記のように決まった。児童Aは商店街を訪れ、品物の数・種類・値段などについて、具体的に数値を調べることができたので自己評価は3とした。しかし、学習活動記録の「次の一手」では、数値以外で聞き足りないことを感じ、「深く聞けなかった、今度はちゃんと調べたい」と、聞き方に対して問題意識をもつことができた。

基準	3	新しく具体的なことが3つ以上分かった。
	2	新しく具体的なことが1つ～2つ分かった。
	1	新しいことが分かった。

(イ) 詳しく知ることができる聞き方をしよう - 評価の基準 をつくる -

児童Aがしっかり調べたいと思ったのは、お客さんが減った原因として、「生活がアメリカ式になってきた」と店の人は言ったが、その意味を尋ねなかったからである。一方、学級では、第1回訪問の自己評価が全員3を達成し、次の目当てを決めることになった。児童Aはアメリカ式という言葉で困ったことを発言した。他にも、「いろいろな問題があるでは、具体的に分からない」「大型店の進出で商店街がはやらなくなったのは、なぜか分からない」という意見が出された。そこで、第2回の目当ては、「詳しく知ることができる聞き方をしよう」に決まった。聞き方のコツが分かった児童Aはさ

っそく自主的に前回の店を訪問し、アメリカ式について詳しく聞き取ることができた。

基準	3	「どういうことですか」「たとえば」「なぜ」などと、返ってきた答えに対して聞くことができた。
	2	質問したい内容を相手にきちんと伝えることができた。
	1	質問したいことを伝えることができた。

迎えた第2回、児童Aは大型店を訪れた。ところが、十分な聞き方ができず、自己評価は商店街を訪れた級友の大半が「3」とした中で、ただ1人「1」であった。「お店の人にすぐ声を掛けられなかった」と商店街の気安さとは違い、声を掛けにくく、大型店での聞き取りの難しさを体験した。

(ウ) お店や町の人々の気持ちを探ろう - 評価の基準 をつくる -

第3回が最後の訪問となる。人の思いや願いにも気付いてほしいと考え、店の人の言葉や行動に着目し、気持ちの面まで考えている二人の追究を取り上げ、中間発表を行った。二人のよさについて話し合う中で、児童Aは、「いっちゃんカード一つを作るのにも様々な障害があり、何回も会議をしている」ことから、「いいものを作ろうとする商店街の人々の気持ち」をくみ取り、「今度は、店の人の気持ちとかを感じられることを聞き出したい」と、気持ちを探っていくことの大切さに気付いていった。

基準	3	行動・表情・言葉などから、商店街や一色町への思いを探ることができた。
	2	言われた言葉から、商店街や一色町への思いを探ることができた。
	1	商店街や一色町への思いを探ることができた。

児童Aは、再び商店街を訪問した。そして、店の人の言葉「お客さんに喜んでもらうため」や、朝早くから営業して「いつでも来られるようにお客さんのことを考えている」行動をしっかりとらえ、店の人の気持ちや接客の姿勢に気付くことができた。自己評価を3とした児童Aは、さらに、商店街と大型店の違いや、同じ町の中での共存の仕方などについて、自主的に商工会へ聞き取りに出掛けた。

(I) 人々の思いを自らの力に変えて - 助言・評価を受ける -

追究したことをまとめ、学級発表会を行った。「商店街は一色町の大切な場所」という発表をきっかけに、どのように大切な場所であったのか話し合った。今では大型店にその役割が移ってきているが、「町の人々の生活を支えていた場所」であったこと、昔も今も「人と人が触れ合える場所」であることを確認した。そして、「商店街が続いていくためには、商店街だけでなく、町全体が活性化する必要がある」というお店の人の言葉を紹介した子の発言によって、子供たちの意識は、商店街の保ってきた価値を守り、町全体の活性化を考えていくことに向いていった。

児童Aが考えたのは、触れ合いのある温かさを大切にしたい「あいさつ」と町の人々に喜んでもらえる「ごみ拾い」である。しかし、自分たちで考えている活動が本当に町の未来のためになるのか不安を感じた。そこで、商店街の追究でお世話になった商工会の局長さんや、花屋を営みながらボランティア活動をしているSさんにアドバイスしてもらう機会を設けた。お話を聞いて、児童Aは、「今の気持ちをずっともち続けて、忘れないようにあいさつをやりたい」「みんなにとって住みやすい町にすることに、そうじはつながる」と振り返っている。

町の先生のアドバイスの後、二つの活動に取り組むことになった。児童Aが当初から考えていたように、一つは、あいさつを自分たちから町の人に広げていくことである。もう一つは、きれいで住みよい町になることを目指して、町の汚れているところをそうじしていくことである。あいさつは主に登下校時に、そうじはボランティアグループ「夢！ 応援団」の人たちが加わり、一緒に活動していくことになった。

町の先生とかかわる場合には、子供たちの活動に対して評価していただく場を設定している。感想や助言を記録に残したり、手紙を書いてもらう方法である。今回は後者の方法で励ましをもらった。

一色中部小学校6年生のみなさんへ

夢ポストには、「私たちの住む一色町をきれいにしたい」という声が一番多く入っています。私たちは、その夢をどのような形で実現していけばよいか何度も何度も話し合いを重ねていました。そうしたとき、中部小学校6年生のみなさんが、いちょう学習で清掃活動を計画しているという情報をキャッチしました。それを知り、私たちはみなさんの清掃活動のお助け隊ができれば夢の実現に一步近づけると考え、参加させていただくことにしました。

6年生のみなさんと一緒に清掃ボランティアをして、私たちはみなさんの活動に取り組む姿勢に大きな感動を覚えました。その日は、今にも雪が降ってきそうな寒い日でした。清掃開始から1時間近く経ち、終了時刻も近づいてきました。しかし、誰一人手を休めようとしません。みな、黙々とごみを片付けています。「もっともっと、きれいにしたい」と、小さな背中が語っています。寒いのにどの子の顔も上気し、「あつい」と上着を脱ぐ子もいました。予定時刻が過ぎ、清掃ボランティアは終わりました。 (中略)

周りを見回してみると、さっぱりときれいに片付き、活動の成果は明らかでした。よく冷えたジュースが心地よく、冷たい北風さえさわやかに感じられました。私たちは、みなさんと清掃ボランティアに参加できたことを誇りに思います。また、とても楽しかったです。これからも、どうぞよろしく願いいたします。

平成 17 年 3 月 16 日

夢！ 応援団

3 組織マネジメントを活用した困難点の克服 (平成 17 年度の取組)

(1) 研究実践上の困難点

ア 保護者アンケート・コーヒー座談会による分析

平成 16 年度 第 2 回「学校の教育活動に関するアンケート」について

平成 17 年 2 月 14 日実施

総合的な学習の時間に関するもののみ抜粋 (全 15 項目中)

A : できている B : おおむねできている C : あまりできていない
D : できていない E : 分からない

ア 子供は意欲的に学習に取り組んでいる。

2 月	A	B	C	D	E	
合計	115	228	54	12	19	人数(428)
	26.9	53.3	12.6	2.8	4.4	%

イ どのような内容の学習をしているのか伝えられている。

2 月	A	B	C	D	E	
合計	93	225	73	17	19	人数(427)
	21.8	52.7	17.1	4.0	4.4	%

【保護者の主な意見】

- ・総合学習というと、最近は一色町についての勉強は多く見られるのですが、このごろの事件から見ても身の安全の守り方とか地震などもクラスで話し合ってみてほしいです。
- ・総合学習の中で、持ってくるもの・作るもの、なかなか子供に聞いても親にはよく伝わらず、親がどこまで助言・手助けをしていいのかわかりません。特に、11月の学校公開では、あんなにたくさんの材料を並べて、好き好きに子供たちが作る作業を見て、学級通信などにもっと詳しく載せてあればと思いました。
- ・学校としての教育方針や目標などは伝わってきますが、学年として、または自分の子供のクラスとしての活動などを聞く機会が少ないように思います。担任の先生との意見交換の機会がもう少しあればと思います。

2月に実施した調査ではアはA・B合わせて80.2%で、昨年7月の調査と比較するとほぼ同じ、イ
一色6

は74.5%で5ポイント上回った数値が出ている。しかし、10月のPTAコーヒー座談会でも、内容がよく分からないという指摘があり、学年ごとの年間指導計画を配布したが、いちょう学習の内容が十分伝えられたとは言えない。授業公開時には、計画的に保護者の参加があるような学習を展開したり、家庭で更に興味・関心をもってもらえたりする工夫をすることを全体で確認した。

イ 教職員による分析・研究全体会での振り返り

平成 16 年度 第 2 回「教育活動・学校経営についての自己診断」						平成 17 年 2 月 24 日実施
総合的な学習の時間に関するもののみ抜粋（全 63 項目中）						
A：よくあてはまる B：ややあてはまる C：あまりあてはまらない						
D：全くあてはまらない E：無答						
ア 地域の特色を生かした総合的な学習の時間に取り組んでいる。						
2 月	A	B	C	D	E	人数(23) %
合 計	12	9	0	0	2	
	52.2	39.1	0	0	8.7	
イ 各教科や総合的な学習の時間などで思考力を重視した問題解決的な学習指導を行っている。						
2 月	A	B	C	D	E	人数(23) %
合 計	5	12	4	0	2	
	21.7	52.2	17.4	0	8.7	
ウ 環境，国際理解，福祉ボランティアなどの課題を教育活動に積極的に取り入れている。						
2 月	A	B	C	D	E	人数(23) %
合 計	0	8	13	1	1	
	0	34.8	56.6	4.3	4.3	
【職員の主な意見】						
・防災や福祉実践教室，6年生とのお別れ集会などの行事に関連させた内容を総合的な学習の時間の年間カリキュラムにきちんと入れておくとよい。						
・環境，国際理解，福祉ボランティアなどで一年のうちどこでどの教科で取り上げるのかを計画していなかった。教育活動全般で学習していく内容ではあるが，年度始めにきちんとすべて学習できる計画を立てたい。						
・保護者への説明やPRが不十分である。学校だよりを含め，改善すべきである。						

地域の特色を生かした総合的な学習の時間には取り組んでいるが、教科での思考力を重視した問題解決的な学習、環境や国際理解などの取組が不足しているという結果である。福祉実践教室やお別れ集会は、行事として実施するのではなく、総合的な学習の時間に入れて計画することは十分可能と判断した。また、研究全体会の総括では、以下に示すような領域による偏りの是正や評価の簡素化、教科との関連の明確化などを課題として確認した。

総合的な学習の時間の入り口である3年生には、地域の祭り「大提灯」を長期計画で追究していくことは難しく、理解の深まりに個人差がある。4年生の大単元「カーネーション」も同様であり、短期間の取組を検討すべきである。5・6年は特に<産業・経済>が中心であり、他の領域の追究が不十分である。さらに、学年ごとに重複している部分の弊害が、聞き取りの対象である地域の方への負担になっている面がある。

評価資料が書いたものに偏りがちである。書くことが苦手な子には、いつも対話が必要になり、後でフォローすることが多い。評価システムに柔軟性をもたせるためにも、ある程度簡素化すべきである。

子供が身に付ける発達段階的な力（課題を見付ける、調べる、まとめる、発表するなど）の推移の様子が十分把握できていない。各学年で教科と関連を明確にし、基本的なスキルを教科で押さえる作業が必要である。

(2) 組織マネジメントを活用した改善の取組

ア SWOT分析による学校の内外環境の把握

学校が教師集団の力を最大限に発揮していくには、これまでと違った形で同僚性を築き上げ、確保していく必要があると考えられる。本校では、本年度約30%の職員の転入があり、前述のような課題を新しいスタッフで改善していく必要性に迫られた。

SWOT分析とは、学校の内外環境を、強み(Strength)・弱み(Weakness)・機会(Opportunity)・脅威(Threat)に分類して配置し、その俯瞰を通して内外環境を把握・分析し、特色ある学校づくりに向けての方策を探索するための手法である。この分析法を活用して、内外環境を見直すことは、学校のリフレクション(自己評価を含む更新過程)であり、メタ認知的立場で学校を見直すことにつながる。「内外環境要因リスト」から探索に必要と考えられるものを学年部で拾い上げ、一つずつ「把握・解釈シート」に書き出し、順次、S・W・O・Tそれぞれに項目を当てはめた。

内部環境要因リスト(順不同): 児童, 教職員, P T A, 施設・設備, 教材・教具, カリキュラム, 時間割, 校風・伝統など
外部環境要因リスト(順不同): 保護者, 地域住民, 公共機関, 商工会, 歴史・文化, 自然・風土, 地域の産業など

内部環境要因と外部環境要因の把握・解釈シートとその記入例

<p>【内部環境要因：カリキュラム】</p> <p>客観的な特徴や事実</p> <p>町全体で3年間にわたり研究されており、各学年ごとの活動・評価規準などが細かく作成されている。前年度の取組を踏まえ、見直しされたものが引き継がれている。</p>		<p>【外部環境要因：保護者】</p> <p>客観的な特徴や事実</p> <p>本校出身者が多く、教育に関して熱心な保護者が多い。学校公開日や学校行事への参加率が高い。反面、仕事に忙しく十分子供の面倒が見られない家庭も増加傾向にある。</p>	
<p>強み(+) 初めての単元でもカリキュラムに沿って実施することで、子供たちの意欲的な活動を導き出すことが比較的容易である。前年度の経験者から情報を得て、指導に生かすことができる。 S</p>	<p>弱み(-) 硬直的な指導に陥りやすく、指導者や子供が意欲を失う可能性がある。変更した場合、資料づくりなどに時間がかかる。 W</p>	<p>支援的に働く場合(+) 家庭と学校とが補完し、協力し合うことで、一体となった教育活動が展開できる。 O</p>	<p>阻害的に働く場合(-) 子供の生活や学校での活動に過度の干渉が行われたり、阻害されたりする可能性がある。個人的な要望や考えを押し出してくる家庭もある。 T</p>

想定されるすべての内外環境要因を学年部の中で分担し、「客観的な特徴や事実」を把握し、その(+)(-)を検討した。新しい職員を含め、全職員で問題の発見と共有化・明確化を図り、本校の置かれている状況を以下のように分析した。

外部環境は、学校・家庭・地域が相互に補完され、地域に密着した総合的な学習を展開できる状況にある。公共施設での聞き取り・資料集め・体験や地域の産業に携わる人々と繰り返し触れ合うことが可能で、人的ネットワークは豊富である。しかし、これまでの学習の中で、商店街や農家など個人経営先の訪問では様々な問題が生じている。防犯・防災については校区の特性もあり、現実的で具体的な対応を求められている。

内部環境の面では、経験豊かな職員と若手職員で構成されており、子供は元気な中にも落ち着いた生活ができています。地元出身者が少ないのでコミュニケーションの時間の確保が必要である。したがって、カリキュラムの変更には時間を要し、ステップを踏んだ作業が必要である。

いちょう学習 活性化に向けた実行策案(1)

	着手 容易 ←		→ 着手 困難
効果大 ↑	一色中部小だより発行 学習のまとめ・発表のためのスキル習得 資料の整理・活用 異学年・他校との交流 保護者や町の先生の活用 生活科・総合の授業公開（学校公開の日） 児童ポートフォリオによる家庭での評価 町の先生による評価 授業研究会	「年間指導計画」「単元指導計画」の見直し 町の先生のリストアップ 地域の店・工場・公共施設の見学や体験 実践に結びつく現職教育 教材・教具の充実	多目的に利用可能な教室設置 休耕田畑の借用・活用
	学年保護者会開催 学年だよりの充実 教育委員会だより「月報：学び舎」でのPR 町現代化総合学習部会での情報交換 P T A コーヒー座談会での説明 児童「総合的な学習の時間の自分を振り返って みよう」アンケート 保護者「単元一覧表」「年間指導計画」配布 保護者アンケート結果公表 学習の調査・まとめにパソコンを活用 花壇・プランター利用による植物栽培 学習内容に合わせたブックトーク ブロック制による時間の弾力的な運用	町の先生へ「年間指導計画」配布 生活科・総合の学習発表を保護者対象に実施 特別教室利用のための時間割調整 見学体験場所の早期依頼	一色「ふれあい」広報でのPR コンピュータ室の開放 普通教室用パソコン設置
↓ 効果小	一中小地区懇談会開催 職員「教育活動学校経営についての自己診断」 保護者「学校の教育活動に関するアンケート」 家庭の要望精選 読み聞かせボランティアによる地域の民話紹介	学習を授業時間内における追究に限定 教育委員会との連携	学校保健委員会の規模を拡大

いちよう学習 活性化に向けた実行策案(2)

	実行策	いつ	誰が	誰に	何を	なぜ	どのように	予想される効果や反応	留意点
1	一色中部小だより発行	毎月1日	教 頭	保護者	学校だより	学校の方針・教育活動周知	P T A 会員配布	学校の方針，思いや願いを定期的に伝えることができる。	紙面づくりの工夫
2	学習のまとめ・発表のためのスキル習得	随 時	担 任	児 童	レポートのまとめ方・発表の仕方	必要な技能の向上	準備の事前指導	見やすく分かりやすいまとめ・発表が可能になる。	教科等との関連
3	資料の整理・活用	随 時	担 任	他学年の職員	活用のための資料整備	資料や記録の有効活用	資料室整備・ファイル整理	前年度の活動の記録や資料を基に，見通しをもって計画や準備を進めることができる。	資料や記録の確実な保管
4	異学年・他校との交流	随 時	各学年	児 童	追究の発表・意見交換	他者評価	まとめの発表会・意見交換会	相手を意識することで，分かりやすく要点を押さえた話し合いが期待できる。	他学年や相手校との調整・情報交換
5	保護者や町の先生の活用	随 時	各学年	保護者 町の先生	協力依頼	授業の活性化 体験的な学び	ゲストティーチャー アドバイス	保護者の思いや願い，実社会に生きる人の知恵や工夫等を直接学ぶことができる。	事前打合せの場所・時間確保
6	生活科・総合的な学習の時間の授業公開	6 月 15 日	担 任	保護者	授 業	学習内容・活動の理解	学級一日のすべての授業公開	学級での具体的な学習内容・活動を保護者が把握することができる。	教科と絡め，バランスよく公開
7	児童ポートフォリオによる保護者の評価	7 月 12 月 3 月	担 任	保護者	ポートフォリオ	保護者による活動の評価・励まし	児童持ち帰りによる点検	一人一人の学びの変容や成長の跡を保護者が確かめ，励ますことができる。	一単元終了後の評価を記録
8	町の先生による評価	随 時	担 任	町の先生	児童の活動	町の先生による外部評価	聞き取り等によるコメント	評価や励ましを得ることで，次の活動に向けた関心・意欲を高めることができる。	評価を記録に残して保管
9	授業研究会	6 月 10 月 1 月	実施する 担任	全職員	授 業	相互研修	授業公開・研究協議	授業づくりを通して，方向性や課題の共通理解を図ることができる。	共同作業による指導案づくり
10	「年間指導計画」「単元指導計画」の見直し・改善	4 月～	各学年	各学年	年間指導計画 単元指導計画	学校・地域の 実情に合った 変更	作り直し・変更の作業	児童や校区の実態に合った学習を展開することができる。	学年児童の学習履歴の確認

イ 着手容易性・効果性からみた実行策の検討

SWOT分析した結果から、外部環境の支援的要因と内部環境の強みを生かした「特色ある活動や取組」を付箋^{ふせん}に書き出した。1枚の付箋には、一つの事柄を書く。同様に、外部環境の阻害的要因と内部環境の弱みを克服する「問題解決方策」を考え、付箋に書き出す作業を行った。今回は、活性化に向けた校内での取組を考え、それに外部評価を意識したものを加えた。優先順位を決めて取り組むために、「着手容易性」「効果性」という2軸による象限に、付箋の貼り付けを行った。この中で本年度は、「着手容易」「効果大」と考えられる資料P.9の左上を中心とした方策に取り組んでいくことにした。

貼り付けが終わったら実行策を選び出し、資料P.10のようなシートを使って具体的に進め方を検討し計画化していった。このシートの活用により、実行策ごとに具体的な要素を整理することができ、目標や予想される効果を目に見えるようにしていくことができた。実効策2・3・10などは継続して実施し、定期的に検討したり見直したりすることが必要な項目であることが意識されるようになった。

ウ 実践例 - 「年間指導計画」「単元指導計画」の見直し・改善 -

これまでの研究の継続の中で、学年ごとの学習内容について微調整はしてきたものの、大幅な修正や改善はされないできた。そこでまず、前述した昨年度末の研究全体会での課題を再度確認した。

同様に、保護者や教職員アンケートの意見の中で生活科・総合的な学習の時間に関するものを抽出して、新たに単元開発の必要なものを明確にした。これらの検討課題を踏まえて、後述するような見直し・改善を図り、「年間指導計画」と「単元指導計画」を作成した。

平成16年度・平成17年度 いちよう学習の単元比較

年	基本的視点	平成16年度の単元	平成17年度の単元
3年	伝統・文化	ここがすごいぞ！ 大ちょうちん祭り	ふるさと自まんえびせんべい！ 見たい・知りたい・作り隊
	福祉・社会		みんなが住みよい町にー身近な福祉について調べようー
	産業・経済	とっておきの店じまん	見つけよう お店のひみつ
	環境・自然	見つけたよ！ 一色の自然のおもしろさ	
	命・生き方	元気もりもり大作戦	元気もりもり大作戦
4年	伝統・文化		
	福祉・社会	おじいちゃん・おばあちゃんと仲よくなるう	おじいちゃん・おばあちゃんと仲よくなるう
	産業・経済	カーネーションについて知ろう	
	環境・自然	カーネーションプレゼント大作戦	リサイクルにチャレンジ！
	命・生き方	育てよう！ 咲かせよう！ カーネーション	咲かせよう！ カーネーション
5年	伝統・文化		
	福祉・社会	2年生と仲よくなるう	みんなにやさしい 一色の町
	産業・経済	われら「一色のえびせんべい」応援団	えっへん！ ぼくは中部小えびせんべいガイド
	環境・自然	取りもどそう きれいな川	
	命・生き方		信頼される6年生になろう
6年	伝統・文化		大提灯の秘密 調べ隊
	福祉・社会	1年生から学ぼう、そして伝えよう中部っ子の心	
	産業・経済	商店街発 一色町の未来を考えよう	
	環境・自然		そなえよう 東海大地震
	命・生き方	描こう ぼくらの未来予想図	描こう ぼくらの未来予想図

平成17年度5年<産業・経済>の単元は、3年への移行が完了する(平成18年度)までの暫定措置として設定。

一色中部小学校 平成17年度 いちよう学習の単元一覧表

基本的な視点	小学校1・2年生	基本的な視点	小学校3・4年生	小学校5・6年生
人と社会とのかわり	<p>1年 みんな なかよし(1)(4) 学校や交通公園,満国寺への探検を通して,校内の施設や公共の遊具の役割を理解し,楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに,自然に親しみ,自然の素材を生かして遊びを工夫し,友だち同士かかわり合いながら遊びを楽しむことができるようにする。</p> <p>1年 ふゆとなかよし(2) お正月の準備やお正月遊びを通して,家族の中の役割に気付き,それを積極的に果たすとともに,友だち同士かかわり合いながら遊びを楽しむことができるようにする。</p> <p>2年 2年生になったよ(1) 2年生になった喜びを家族や友だちと感じ,自分の成長を感じることができるようにする。</p> <p>2年 みつけたよ,まちのたからもの(3) 校区を探検し,そこにあるものを調べたり,そこで遊んだりすることを通して地区の様子や特徴に気付き,愛着をもつことができるようにする。</p> <p>2年 大きくなったわたしたち(2) 季節の行事に参加することができるようにする。</p>	<p>伝統・文化</p> <p>3年 ふるさと自まんえびせんべい! 見たい・知りたい・作り隊(ア) 地域の名産であり,古くから親しまれているえびせんべいに目を向け,えびせんべいづくりの話を聞いたり,実際にえびせんべいを作ったりすることを通して,えびせんべいを作っている人の工夫や努力,えびせんべいの良さに気付き,地域の良さを見直すことができるようになる。</p> <p>福祉・社会</p> <p>3年 みんなで住みよい町に(イ) 盲導犬,点字,車いす,手話,体の不自由な人のための町の施設等について調べ,その人の置かれた状況に気付き,思いやりの心をもってみんなが助け合ってくらすことのできる町づくりについて考えることができるようになる。</p> <p>4年 おじいちゃん・おばあちゃんと仲よくなる(イ) お年寄りにかかわる調べ活動を通して,お年寄りの思いやお年寄りのために働く人の気持ちを知り,日々の生活の中でも思いやりの心をもってお年寄りとかかわっていくことができるようになる。</p> <p>産業・経済</p> <p>3年 見つけよう お店のひみつ(ア) 商店街の店がお客さんに気持ちよく買い物をしてもらうために工夫していることを調べ,店の人と触れ合う活動を通して,店に親しみをもち,自分の発見したことや店の人の願いを友だちと伝え合うことができるようになる。</p> <p>4年 咲かせよう!カーネーション(ア)</p>	<p>5年 えっへん!ぼくは中部小えびせんべいガイド(ア) 6年 大提灯の秘密 調べ隊(ア) 大提灯の歴史や祭りの成り立ちを追究する活動を通して,大提灯を支えている人々の姿や思いに共感し,祭りを盛り上げていくために自分たちができる活動を考え,実践していくことができるようになる。</p> <p>5年 みんなにやさしい 一色の町(イ) お年寄りや障害のある人と交流する活動を通して,互いに支え合い,助け合いながら生きる共生について理解し,相手の立場や気持ちを尊重しつつ,自分たちなりに考えた方法で交流することができるようになる。</p> <p>5年 信頼される6年生になろう(ウ)</p>	
	自然のかわり	<p>1年 みんな なかよし(6) 1年 おおきなあれ(7) アサガオやサツマイモを育てることを通して,それらの成長に関心をもち,生命をもっていることや成長していることに気付き,植物への親しみをもち,大切にすることができるようにする。</p> <p>1年 あきをみつけよう(5) 満国寺や八王子神社などで秋を見付けることを通して,身近な自然の変化に気付き,自然を大切にしたり人とかわり合いながら遊びを楽しむことができるようにする。</p> <p>1年 あきですてきなものをつくろう(6) 秋のものや身近にあるものを使った作品作りを通して,素材や地域の自然の特徴に気付き,作品作りを深めることができるようにする。</p> <p>1年 ふゆとなかよし(5) 2年 はるとなかよし(5) 栽培や身の回りの動植物との触れ合いを通して,春の自然に親しむことができる。</p> <p>1年 大きくなあれ(7) 栽培したい野菜を決め,収穫を楽しみにしながら種まきや苗の植付けをし,継続して世話をすることができるようにする。</p> <p>2年 生きもの大すき(7) 小動物を飼育し,成長の変化に興味・関心をもち,生き物への親しみをもって大切にすることができる。</p>	<p>環境・自然</p> <p>4年 リサイクルにチャレンジ!(イ) 地域のリサイクルについて調べたり,それにかかわる人との触れ合いや自分たちでできるリサイクル活動を通じて,環境や自然を大切にしていこうとする態度を身に付け,生活の中でリサイクル活動を実践できるようにする。</p>	<p>6年 そなえよう 東海大地震(ウ) 地震が引き起こす地殻変動や災害を調べる活動を通して,地震のもたらす怖さや影響の大きさに気付き,東海大地震に備えるために自分たちでできる活動を考え,実践していくことができるようになる。</p>
	自分自身	<p>1年 もうすぐ2年生(1) 1年間を振り返ることを通して自分の成長を認め,間もなく2年生になるという意識をもち,新1年生を迎えるための教室作りを進んですることができるようにする。</p> <p>2年 大きくなったわたしたち(8) 自分の成長には家族をはじめ多くのかかわりいろいろな人に世話になってきたことに気付くと同時に感謝の気持ちをもち,成長への夢をもって生活できるようにする。</p>	<p>命・生き方</p> <p>3年 元気もりもり大作戦(イ) 自分の生活を振り返り,毎日の生活と健康とのかかわりに気付き,生活をよりよくするための方法を考え,生活に生かすようになる。</p> <p>4年 咲かせよう!カーネーション(ア) 「きれいな花をたくさん咲かせたい」という願いをもつことで,カーネーション栽培を意欲的に続け,町の先生をはじめとした地域の方とのつながりも強めていけるようになる。</p>	<p>5年 信頼される6年生になろう(ウ) お別れ集会や新入生歓迎会を計画・実践する活動を通して,進級の自覚を高めるとともに,自主的に活動する喜び・充実感を味わい,信頼される6年生としてのよりよい生き方が実践できるようになる。</p> <p>6年 描こう ぼくらの未来予想図(ウ) 自分史作りを通して,今までの自分を振り返り客観的に見つめ,これからの自分の夢や生き方について考え,その実現に向けて未来予想図を作ることができるようになる。</p>

単元名の後の数字・カタカナは,内容系列表の該当する内容を表す。

単元の目標まで記入してある欄は,主となる視点。単元名のみが記入してある欄は,関連する視点を示す。

5年「産業・経済」の単元は,3年への移行が完了(H18)するまでの暫定措置として設定する。

2 学年で5つの基本的な視点を実践するという基本線は変更せず，学年や地域の実情に合った追究素材や内容にする。

単元数・指導時間数の検討と，各教科との連携を図る。教科との連携は，内容的な関連だけでなく，スキル面の連携にも配慮する。

単元指導計画の記述の仕方や評価内容・評価計画を精選し，日常の指導の中で無理なく行うことができるように精選を図る。

学年の実情に合わせて，自己評価を取り入れる。その際，評価は3段階でなくてもよい。外部評価については，町の先生とかかわる場合には，評価してもらう場を設定する。保護者には，1単元終了後などに，生活科やいちょうファイルで感想や子供に対する励ましをもらう。

4 平成17年度までの3年間の成果と今後の課題

(1) 子供たちの総合的な学習の時間に関する評価

7月に行った児童評価「総合的な学習の自分を振り返ってみよう」(全12項目)によると，<関心・意欲・態度>「見付ける」「実践する」，<思考・判断>「計画する」「創意工夫する」，<技能・表現>「収集する(2項目：本やインターネット，人とのかわり)」，<知識・理解>「生かす」の計7項目において，昨年と同じ時期より上昇が認められる。「自分で目当てや計画を立て，それに迫るように調べたり聞いたりして最後までやり通す」ことができているという評価である。

しかし，高学年になると，「もっと友だちの追究を参考にすればよかった」と，昨年の自分と比べて厳しい評価をしている。また，「資料が見付からずに繰り返し探しに出掛けた」「自分の予想とは違って地域の人への聞き取りで初めて分かったことがあった」と，振り返りで書いている。この一年に限っても，自己観察や自己調整といった活動が徐々に機能し始めていることが分かった。

6年生にいちょう学習で学んだ感想を聞いてみると，苦労したり真剣に取り組んだりした体験や発表が一番印象に残っていると答えている。

カーネーションを育てた時は，毎日の世話が大変だった。えびせんべいは，店の人が衛生に気を配っているところがすごかった。大提灯では，柱立て・ロウソク作り・提灯の上げ下ろしなど，いろいろな作業があり，真剣な顔におどろいた。どれもきちんと計画し，協力して，真剣に取り組まないとできないことだと，勉強して初めて分かった。【6年児童】

私が一番印象に残っているのは，えびせんべいです。その中でも，調べたことをまとめて，みんなでベイフェスティバルで発表したことです。「さかな広場」には，お客さんがいっぱいとても緊張しました。えびせんべいので紙しばいを作って，他のグループの子に見てもらい，少し直してからやったので，自信をもってやることができました。【6年児童】

(2) 保護者や地域の方からの評価

校外での体験活動や校内での学習のゲストティーチャーとして，地域の方からは，積極的に子供たちの活動の様子や学習活動へのアドバイスをいただいた。実社会で生きる人々の生き方や知恵・工夫から学び，共に活動することによって得られたものは子供たちにとって大きな財産となった。さらに，地域の方と触れ合う機会をつくることで連携が密になり，ボランティア団体との協力が今まで以上に得られるようになった。

保護者へは，学校・学年だよりや教育委員会だより「月報：学び舎」などを通して，子供たちの学習の様子を伝えてきた。その結果，学校公開の日の授業参観や今年から始めた学年懇談会への参加者が多くなった。家庭で子供にアドバイスして感想を寄せていただいたり，ゲストティーチャーとして協力してくださる方も出てきた。しかし，まだ，「どのような学習をしているのか十分伝えられていない」「分からない」と思っている家庭もあり，発信の仕方などについて課題が残されている。

1・2年の時の我が子は声が小さく、発言や発表は苦手だと思っていましたが、いちょう学習の発表会ではしっかりと発表し、自分の意見も述べていて感心してしまいました。3年では身近な人との接し方を学び、6年の兄は地域の方への聞き取りやアンケートなどを通して、見ず知らずの方との話し方を学ぶよい機会と感じました。人との接し方を段階的に学べるのがよいと思いました。【3年保護者】

私たちが子供時代にはなかった総合という授業があることを1年生の時に知り、分かりにくいものだなと思いながら時を経てきました。6年間の生活科やいちょう学習を振り返って、高学年になって力が付いてきていると感じます。今年の実験でも自分で調べてまとめることができたのは、いちょう学習で身に付いたことだと思います。現代は核家族化が進み、人間関係が希薄になってきていると言われていています。いちょう学習では、地域に密着したよいテーマを選んでくださっているので、地域の人たちと触れ合い、いろいろな話を聞きながら交流をもち、コミュニケーション力をどんどん磨いていってくれたらと思います。【6年保護者】

(3) 教師への効果

指導と評価の一体化を目指し、学習活動に対する評価規準・基準と実際の子供の活動の姿や学習カードなどの記録とを丹念に照らし合わせる作業を積み上げたので、一人一人の子供の特性や成長の様子を詳細につかむことができるようになった。この取組により、それを達成するための手だても具体化されるなど、授業づくりの質が大きく向上し、評価規準に達する実践が増えてきた。

また、子供の自己学習力の向上を目指した取組（学習と評価の一体化）により、授業過程を「子供が自ら学習を振り返り、改善していく」という視点でとらえて、子供の主体性や内面の変化を理解していくようになった。グループ学習など様々な授業形態の工夫がみられるようになり、相互評価や他者評価が様々な形で授業に導入され、子供自信が学習を振り返り、次の学習を切り開いていく場が多く設定されるようになった。

地域の特色を生かした教材の発掘や単元開発は、学年の教師の共同作業で進めることが多くなり、評価規準・基準の作成や指導過程の構想など、授業づくりでは他学年の教師も加わり、活発に検討がなされるようになってきた。積極的に地域へ出向き、地域の方々と交流し、地域についての理解が一層深まった。

話し合いでは、一部の発言力のある子に押されることなく、疑問を投げ掛けたり、より説得力のある意見を言ったりする子が出てきて、みんなで深く追究しようとする姿勢が育ってきた。調べる段階での人とのかかわりが、学習する仲間とのかかわりにも影響するようになり、学級の雰囲気が変わってきた。そのため、国語・社会などの教科においても、積極的に話し合いに加わるのできる子が多くなった。【3年担任】

問題解決型で学習を進めることが多いので、教科学習では得られない様々な力を付けることができた。高学年では、追究したことをまとめたり、発信したりする活動を通して、表現力やプレゼンテーション能力が高まってきた。自らの活動を振り返ることによって、自分の力で次の追究すべき方向を切り開いていくことができるようになった。さらに、町の先生や家族から自分たちの活動を評価してもらうことによって、学んだことを生かして、地域のために役立てていこうとする社会的実践力が芽生えてきた。【6年担任】

本年度は、学校の内外環境を把握し直し、保護者の声やこれまでの実践の総括を基に、単元の組み替えや開発を中心に行ってきた。新しい単元での指導と評価の一体化・学習と評価の一体化の具体的な取組は、研究の途についたばかりである。また、聞き取りや資料収集の仕方、発表の仕方や追究のまとめなどは、国語科をはじめとした他教科の学習内容と関連している。効率よく、より深いレベルの活動や追究ができるように各教科との関連を強く意識した取組が今後の課題である。